

渡辺康代 著

● 伊賀国上野と下野国烏山を事例に

近世城下町の付祭りの変化



海青社



▲ 東町の上野天神宮 (2014 年)



◀ 西町の町印(諫鼓)と楼車 (2011 年)



▲ 幸坂町の阿拝神社 (2018 年)



▲ 筑紫山から烏山の町並み・那珂川・八溝山地をのぞむ (2013 年)

このプレビューでは表示されない頁があります。



▲ 享保 19 年の宮原八幡宮奉納絵馬 (1997 年)



▲ 歌舞伎舞台と踏板と舞台背景の山 (烏山町教育委員会編『烏山町の文化財』, 2000 年, 8 頁, 那須烏山市教育委員会提供)



▲ 河岸段丘上の鍛冶町をのぞむ (1997 年)



▲ 元田町の屋台と若衆 (1995 年)

はじめに

格差の進行する現代。その一つ、教育格差や子どもの貧困問題も抱える昨今の日本において、私は、E・H・カー『歴史とは何か』の中の「歴史は現在と過去の対話である」という言葉を想起する。近代に学校教育が開始される以前の日本では、寺子屋以外にどのような教育システムが機能していたのであろうか。その一つに社会教育システムがあったのではないかと気づかされる。子どもを社会全体で支える、地域社会による子育て、人育てが、現代の及びもつかない力を発揮していたと考えさせられるのである。現代こそ、祭りを単なる遊興としてではなく、地域における社会教育の重要な柱であったと捉え直してみる必要があるだろう。通時的に祭りを研究することで、地域環境や、過去の市井の人々が選んだ生き方や思考・姿勢を理解し、町人生活の実像により接近できる。そして、それは私たちが現代社会を生きていく上での指針となるはずである。

「ふるさとの祭りはなぜ、いつから行われているのか」……それらの問いには、皆それぞれにちゃんと固有の歴史と理由があるはずである。本書は、さまざまな地域における特色ある祭りを分析するために、近世城下町における祭りをひとつの「ものさし」として紹介するものである。前近代、とりわけ近世において全国的に設置された城下町における祭りはいかなるものだったのか、その内容は不変だったのか、変化があったのか、何故その内容が採択されたのか……こうした自身の中で湧き上がってきた謎を解明するものである。

その具体的事例として伊賀国上野城下町の「上野天神祭」と、下野国烏山城下町の「山あげ祭り」を取り上げる。

本書は、筆者が2015年3月に筑波大学より取得した論文博士の学位請求論文「近世城下町における祭礼の変化に関する歴史地理学研究——伊賀国上野および下野国烏山を事例として——」をもとにしている。出版に際しては、内容の一部を修正、補筆するとともに、「付祭り」とその「担い手」の定義の明確化を図り、タイトルを『近世城下町の付祭りの変化——伊賀国上野と下野国烏山

このプレビューでは表示されないページがあります。

を事例に――』にあらためた。

第1章「序論」では本書の研究目的を、第2章では、総鎮守の勧請時期と史料の伝存のあり方の相違を比較しながら、それぞれの地域を概観した。第3章では近世における祭礼の手本となった東照宮祭礼や天下祭における行列型祭礼内容を紹介した。第4章では伊賀国上野の近世城下町の成立と祭りの開始とのリンク、行列型祭礼内容の継承を指摘した。第5章では下野国烏山城下町における総鎮守の祭りが、行列型から地芝居へと、その内容を転換していったことを指摘し、さらにその社会的背景を探り、第6章では本書から得られた知見を集約するとともに、今後の課題を述べた。

本書の刊行にあたり、社団法人日本地理学会の2019年度出版助成の交付を受けた。また、出版に際して海青社の宮内 久社長、社員の皆様の多大なご尽力を賜った。図の掲載においては国立歴史民俗博物館、三重県総合博物館、伊賀市教育委員会、津市教育委員会、那須烏山市教育委員会、伊賀市史編さん室、紀州東照宮、四日市市立博物館をはじめ諸機関にご協力いただいた。以上、記して心より感謝申し上げたい。

写真は引用先を書いているものを除き、筆者が撮影したもので、撮影年次のみを記した。

2020年2月

渡辺 康代

近世城下町の付祭りの変化

— 伊賀国上野と下野国烏山を事例に —

目 次

目 次

「東照宮縁起絵巻」にみる祭礼に関与する人々	ii-iv
東町の上野天神宮	vi
幸坂町の阿拝神社	vi
西町の町印(諫鼓)と楼車	vii
筑紫山から烏山の町並み・那珂川・八溝山地をのぞむ	vii
「十文字」に所在する午頭天王旧社地	viii
「山あげ祭り」における芝居舞台と背景の山	viii
播磨国総社(射楯兵主神社)の三つ山神事	ix
山王祭における大伝馬町の諫鼓の出し	ix
はりぬき大頭	x
石引き	xi
三ノ町筋の鬼行列	xii
中町の麒麟の楼車幕	xii
津八幡宮祭礼における神功皇后の人形屋台	xii
三味線囃子の乗る東町の楼車	xii
下境のささら獅子舞	xiii
江戸紙仲間によって奉納された宮原八幡宮の灯籠一對	xiii
享保19年の宮原八幡宮奉納絵馬	xiv
河岸段丘上の鍛冶町をのぞむ	xiv
歌舞伎舞台と踏板と舞台背景の山	xv
元田町の屋台と若衆	xv

はじめに	1
第1章 序 論	11
第1節 近世城下町研究および近世都市祭礼研究の成果と課題	11
1. 近世城下町の研究史とその課題	11
2. 近世都市祭礼の研究史とその課題	13
第2節 本書の目的と課題	19
第2章 研究対象地域と研究方法	29
第1節 伊賀国上野城下町における総鎮守・天神宮の歴史的推移と 祭礼史料	29
1. 上野城下町における総鎮守・天神宮の歴史的推移	29
(1) 上野における町立てと総鎮守・天神宮の歴史的推移	29
(2) 現行および近代期の上野天神祭	38
2. 津藩における町方史料および藩の正史と祭礼絵巻	42
第2節 下野国烏山城下町における総鎮守・牛頭天王社の歴史的推移と 祭礼史料	44
1. 烏山城下町における総鎮守・牛頭天王社の歴史的推移	44
(1) 烏山における総鎮守・牛頭天王社の歴史的推移	44
(2) 現行の「山あげ祭り」	51
2. 烏山城下町における町方史料	56
第3章 付祭り内容とその担い手の歴史的変遷	65
第1節 付祭り内容の歴史的変遷	65
第2節 行列型祭礼とその担い手の変化	68
1. 大嘗会における「標山」	68
2. 大和国の春日若宮御祭	69
第3節 江戸の天下祭の変遷	76
第4章 総鎮守とその付祭りの担い手からみた伊賀国上野 城下町の構造と変化	85
第1節 中近世移行期における上野城下町の神事と付祭り	85

1. 上野城下町における住民構成と城下町の構造.....	85
(1) 中近世移行期の伊賀郷士.....	85
(2) 16 世紀末から 17 世紀初頭における上野城下町の住民構成.....	89
2. 中近世移行期における付祭り内容とその担い手.....	93
(1) 16 世紀後期における伊賀郷士による神事と付祭り.....	93
(2) 中近世移行期における上野城下町の付祭り内容とその担い手.....	98
第 2 節 近世上野城下町における三筋町町人による付祭り.....	107
1. 三筋町の成立と枝町.....	107
(1) 三筋町と町役の家々.....	107
(2) 枝町の成立とその生業的特徴.....	113
2. 17 世紀半ば以降における上野城下町の付祭り内容とその担い手.....	116
(1) 17 世紀における付祭りの内容的特徴.....	116
(2) 上野天神祭の付祭り内容とその担い手.....	131
第 3 節 18 世紀半ば以降における上野城下町の枝町町人による 付祭りへの参加.....	136
1. 枝町および在郷から三筋町への新興商人の移入.....	136
(1) 紡績業の発展.....	136
(2) 喰田庄右衛門の経歴からみる上野枝町の住民構成.....	138
2. 18 世紀半ば以降における上野城下町の付祭り内容と その担い手の変化.....	141
(1) 18 世紀半ば以降における付祭り内容と枝町町人の参加.....	141
(2) 18 世紀末期における楼車の登場.....	148
第 4 節 まとめ ― 上野城下町における中近世移行期から近世末期までの 付祭りの推移.....	155
 第 5 章 下野国烏山城下町における付祭り内容と担い手の変化.....	171
第 1 節 中近世移行期における烏山城下町の住民構成と付祭り内容.....	171
1. 戦国期城下町の住民構成.....	171
(1) 中近世移行期における烏山城下町の構造.....	171
(2) 中近世移行期の烏山城下町を構成した人々.....	180
2. 中近世移行期における付祭り内容とその担い手.....	185
(1) 中近世移行期の下野国における付祭り内容の特徴.....	185

(2)古町六人衆による神事および付祭りの世話.....	192
第2節 17世紀中後期における近世城下町の各町町人による付祭り.....	196
1. 烏山城下町への他国商人の来住.....	196
(1)烏山五町の整備.....	196
(2)17世紀中後期から18世紀における烏山城下町の産業と 交通網.....	199
(3)他国商人の来住.....	210
2. 17世紀後期における仮装行列から芝居屋台への 付祭り内容の変化.....	223
(1)17世紀半ばにおける仮装行列.....	223
(2)芝居屋台の開始.....	229
第3節 18世紀以降における付祭り内容とその担い手の広がり.....	235
1. 烏山における産業の発展.....	235
(1)紙・楮・煙草の集散地としての烏山.....	235
(2)烏山町における店借人および雇人と彼らの出身地.....	240
2. 芝居屋台にみる付祭りの担い手の広がり.....	245
(1)指南・他所役者の招聘.....	245
(2)若者衆の活躍.....	250
第4節 まとめ——烏山城下町における中近世移行期から近世末期までの 付祭りの推移.....	256
 第6章 結 語.....	273
第1節 上野と烏山における総鎮守とその付祭りの変化の共通性と相違.....	273
1. 城下町の総鎮守の検討.....	273
2. 中近世移行期における付祭り内容とその担い手.....	277
3. 17世紀半ばにおける仮装行列とその担い手.....	278
4. 17世紀後期以降の付祭り内容とその担い手の変化.....	281
第2節 課題と展望.....	286
 参考文献・引用史料.....	288
索引.....	302
あとがき.....	312

第1章

第1-1 図 「東照宮縁起絵巻」にみる祭礼に関与する人々	21
------------------------------------	----

第2章

第2- 1 図 対象地域上野とその周辺	30
第2- 2 図 現在における上野城下町の史跡と上野天神宮	31
第2- 3 図 東町の上野天神宮	34
第2- 4 図 幸坂町の阿拝神社	36
第2- 5 図 明治期における上野村	39
第2- 6 図 上野天神祭における東御旅所	40
第2- 7 図 上野天神祭の西御旅所となる金峯神社境内	40
第2- 8 図 西町の町印(諫鼓)と楼車	42
第2- 9 図 烏山の市街地	45
第2-10 図 筑紫山から烏山の町並み・那珂川・八溝山地をのぞむ	46
第2-11 図 「香典帳」にみる 16 世紀における那須氏の勢力範囲	47
第2-12 図 「十文字」に所在する牛頭天王旧社地	51
第2-13 図 「山あげ祭り」における芝居舞台と背景の山	53
第2-14 図 御庭拝借の儀式	54
第2-15 図 「赤坂町祭礼記録」	57
第2- 1 表 「香典帳」にみる那須政資の葬儀への参列者と香銭額	49
第2- 2 表 山あげ祭りにおける烏山各町の組織	55

第3章

第3- 1 図 春日若宮御祭における日使	71
第3- 2 図 春日若宮御祭における馬長児	71
第3- 3 図 春日若宮御祭における田楽座	72
第3- 4 図 春日若宮御祭における将馬	73
第3- 5 図 春日若宮御祭における奴行列	74
第3- 6 図 山王祭における大伝馬町の諫鼓の出し	78
第3- 7 図 天下祭における「はりぬき大頭」	79

第4章

第4- 1 図 寛永年間における上野城下町	86
-----------------------------	----

第4- 2図	西蓮寺境内の真盛上人の廟.....	87
第4- 3図	正保国絵図(伊賀国)の記載事項.....	88
第4- 4図	観菩提寺正月堂の大餅会式における供物.....	100
第4- 5図	観菩提寺正月堂の大餅会式における練り込み.....	101
第4- 6図	天保13年における日光舜仁親王一行の宿所を務めた上野本町筋の商家.....	112
第4- 7図	近世中期における上野城下町.....	113
第4- 8図	「唐船」の作り物.....	119
第4- 9図	雑賀踊り.....	120
第4-10図	具足着.....	121
第4-11図	面かぶり.....	121
第4-12図	餅搗踊り.....	122
第4-13図	近世の津城下町と従前よりの町場.....	126
第4-14図	はりぬき大頭.....	129
第4-15図	母衣武者の仮装.....	130
第4-16図	津城下町の伊予町の町印.....	130
第4-17図	石引き.....	133
第4-18図	算術を教える喰田庄右衛門夫妻像.....	140
第4-19図	天保11年「伊賀上野天満宮祭礼九月廿五日行列略記」.....	144
第4-20図	津八幡宮祭礼における神功皇后の人形屋台.....	147
第4-21図	小玉町の楼車.....	150
第4-22図	新町の町印.....	152
第4-23図	向嶋町の鉄英剣鉾.....	152
第4-24図	上野城下町における付祭りの推移.....	158
第4- 1表	「和歌東照宮御祭礼之次第書」(元和8年)に描かれた和歌祭の行列.....	118
第4- 2表	「江戸天下祭図屏風」(1659年頃)に描かれた山王祭の行列.....	123
第4- 3表	「勢陽雑記」にみる津八幡宮の付祭り内容とその形式.....	128
第4- 4表	名張郡36ヶ村と築瀬(名張)町分の上野天神宮八百五十歳祭事への 寄進物.....	137

第5章

第5- 1図	烏山藩領の村々と関連地域.....	173
第5- 2図	延宝9年頃における烏山藩の家中.....	174
第5- 3図	元禄16年における町年寄および問屋役の分布.....	176

第5- 4 図	寛政2年における町年寄および問屋役の分布	177
第5- 5 図	正保年間における烏山城下町の構成と諸寺の位置	179
第5- 6 図	下境のささら獅子舞	189
第5- 7 図	「氷川祭礼絵巻」に描かれた獅子舞	191
第5- 8 図	滝の太平寺の石段	202
第5- 9 図	江戸紙仲間によって奉納された宮原八幡宮の燈籠一對	203
第5-10 図	那珂川水運による江戸との結びつき	209
第5-11 図	享保19年の宮原八幡宮奉納絵馬	210
第5-12 図	安永2年の宮原八幡宮奉納絵馬	210
第5-13 図	辻家系図	213
第5-14 図	宝永～元文年間における辻家による近隣農村への前貸	214
第5-15 図	河岸段丘上の鍛冶町をのぞむ	223
第5-16 図	歌舞伎舞台と踏板と舞台背景の山	230
第5-17 図	大名奴行列を先導する鳥毛	231
第5-18 図	元田町の屋台と若衆	249
第5-19 図	烏山城下町における付祭りの推移	259
第5- 1 表	17世紀後期における烏山城下町所在の寺院	175
第5- 2 表	烏山町(酒主村)の職業構成	204
第5- 3 表	18世紀における烏山城下町人町の屋敷地等の移動	217
第5- 4 表	烏山鍛冶町の圍城家を取り扱った紙の種類	222
第5- 5 表	烏山における牛頭天王祭礼の付祭りの変遷	225
第5- 6 表	芝居屋台興行に伴う他所役者等の依頼	233
第5- 7 表	文政9年における烏山藩の諸方御借金	239
第5- 8 表	宗門改帳にみる享保16年における中町の家族構成と雇人	242
第5- 9 表	宗門改帳にみる享保16年における烏山町人町の構成人数	245

第6章

第6- 1 図	中近世移行期から近世末期における城下町の付祭り内容とその担い手の変化	279
---------	--	-----

第1章 序 論

第1節 近世城下町研究および近世都市祭礼研究の成果と課題

1. 近世城下町の研究史とその課題

本書は、伊賀国の上野城下町と下野国の烏山城下町を主な事例として、両城下町の総鎮守とその祭礼内容および担い手のそれぞれの変化を、中近世移行期から近世末期にわたり通時的に解明するものである。

祭礼の内容だけではなく、一見変化が乏しいと思われてきた町の総鎮守に祀られる神々およびその鎮座地も、時代によって変化してきた。鎮守社とは、国・郡・城・寺院・町・村落などを守護する神社であり、町の総鎮守とは町を守護する神社のことであるが、これも領主や城主の交代や明治期の神社合祀などを契機として、その鎮座地や規模、氏子構成に変化が生じるケースは少なくなかった。町に祀られてきた総鎮守の勧請と再勧請の時期を検討することは、町場としての開発の先行地区と後発地区とを判断する際の一指標となると考える。本書は、総鎮守とその祭礼、およびそれらの変化を通して、城下町をはじめとする町の構造変化を明らかにすることを目的の一つとするものである。

近世城下町研究に関して、これまで、日本史学や建築史学、歴史地理学の立場から、武家地・寺町・町人町の配置など、城下町の空間構造に注目した研究が蓄積されてきた。その一つに、矢守¹⁾一彦による城下町の形態が変化していく規則性の存在を明示した歴史地理学的研究がある。矢守の研究は、日本各地の城下町絵図をもとに、近世城下町の都市性の形成過程と都市的形態の整備過程の規則性を明示したところにその特徴がある。歴史地理学や日本史学を中心に行われてきた城下町の形態とその変化に関する研究は、中近世移行期から17世紀前期という時期にその注目が集中してきた。この延長線上にある潮流としては、とくに建築史学による近世城下町社会の分節構造論がある。近世城下町

このプレビューでは表示されないページがあります。

第2章 研究対象地域と研究方法

第1節 伊賀国上野城下町における総鎮守・天神宮の歴史的推移と祭礼史料

1. 上野城下町における総鎮守・天神宮の歴史的推移

(1) 上野における町立てと総鎮守・天神宮の歴史的推移

本書では町の総鎮守の神事と付祭りを取り上げる。それは城下町における最大の動員数をもつ祭礼として開始されたからであり、それに関わる城主や武士、町人、在郷の村人といったさまざまな「担い手」を捉えることが可能であるためである。町に存在する諸社のなかで、まず城下町の総鎮守が勧請・再勧請された経緯を確認する。第2章では、上野と烏山の両城下町の成立および総鎮守勧請の時期とその経緯、そして、神事と付祭りを分析するにあたっての根本史料の特徴という2つの側面から、両城下町の構造と神事および付祭りの担い手について予察的に考察しておきたい。

上野(現、三重県伊賀市上野)は、上野盆地中央部に舌状に展開する洪積台地(上野台地)の北端部に位置し、北を服部川(山田川)と柘植川、南を久米川、西を木津川(長田川)が取り囲む要害の地にある(第2-1図)。上野城の築城は天正13年(1585)に大和郡山城から筒井定次が入封したことに始まる。

上野城下町については、歴史地理学の立場から中西和子²⁾が、藤堂高虎の時代に、大手を出た「通り」が主たる町となる筒井定次のタテ町型城下町を継承しつつ、大手を出た「通り」に直交する「筋」が主たる町となるヨコ町型城下町へと移行したことを想定している。しかし、天正13年(1585)に入封した前城主である筒井定次がタテ町型城下町プランを上野城においてどの程度まで実施していたのか、さらには筒井氏入封以前の伊賀国の守護、仁木氏が館を構えていた時代における上野の町場の展開については未だ明らかではない。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第3章 付祭り内容とその担い手の歴史的変遷

第1節 付祭り内容の歴史的変遷

日本列島における付祭り内容にはいかなる歴史的変遷がみられるのであろうか。本章では、日本列島における付祭り内容の歴史を大局的に捉えておきたい。

8世紀初めに編纂されたとされる日本最古の歴史書『古事記』における、天の岩屋の場面には、男鹿の肩骨を焼く太占の様子が描写されている。日本列島では、古来よりその年における作物の豊凶の占いが行われてきた。この担い手に注目すると、専門的かつ限定的な人々によって行われたと考えるのが妥当であるため、「神事」と呼ぶにふさわしい。また、『古事記』には、天の岩屋に籠もってしまったアマテラスを引き出す作戦として、仕組まれた祝祭の内容が語られる。そこには長鳴き鳥のニワトリの声、勾玉や鏡、^{しろにきて}白和幣と^{あおにきて}青和幣で装飾された大きなマサカキ(真榊)を太御幣(大御幣)として奉ること、そして大勢の神々の前でのアメノウズメの妖艶な踊りが繰り広げられたとある。ここに、少なくとも8世紀初めの日本列島の祝祭の場において、勾玉や鏡で装飾された大木の真榊や踊りが欠かせなかったことが示されている。

縄文時代の発掘品のなかに顔のパーツの一部である鼻や耳などの装着具があり、これを付けて豊猟・豊作の祭りが行われていたと考えられる。弥生時代における祭祀内容のひとつに、「鳥装」すなわち鳥の仮面を被る仮装があったとされる。仮面を被ることで個人が消え、神と交信できる別のシンボリックな存在となることに意義があった。神殿と考えられる場所へ船で向かう「鳥装」の人が、奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡¹⁾の土器にみられる。

日本列島では古来、①吉凶を判断する占い、②榊のような大木、山様のものを祀ること、③踊りや喜劇、④仮面を被るなど仮装して、人以外の何かになること等が、神事および付祭り内容として行われてきたといえる。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第4章 総鎮守とその付祭りの担い手からみた伊賀国上野城下町の構造と変化

第1節 中近世移行期における上野城下町の神事と付祭り

1. 上野城下町における住民構成と城下町の構造

(1) 中近世移行期の伊賀郷土

近世の歴史人口学では「宗門改帳(宗門人別帳)」を基礎史料とすることが多いため、宗門改帳への記録が一般化していた18世紀以降が分析対象となる場合が多い。ゆえに、それ以前における在郷や城下町を構成していた住民の実態については史料的な制約が大きく、未解明な部分が多く残されてきた。

この点の解明に資する史料として、寺院の供養帳や過去帳がある。同史料には戒名のほかにも居住地や続柄などが記載されている場合も多い。それゆえに同史料を使用する場合には、人権に配慮する必要がある。とりわけ、過去帳の扱いには十分な慎重さが求められる。本研究の対象地域においては、『伊賀市史』第4巻に「西蓮寺過去帳²⁾」が翻刻・公表されている。そこで、本節では同書で翻刻・公表されている天正18年(1590)から慶長13年(1608)の範囲に限定してこれを使用し、中近世移行期における伊賀国上野城下町の住民構成の一端を明らかにすることを試みる。

明治4年(1871)「伊賀国阿拝郡五区戸籍之一 一番組 東町³⁾」には、当時の東町住民のなかでも町屋敷地を多く集積し、町年寄などの役職を歴任した窪田家、築山家、森家、菊輪家に「西蓮寺檀家」と特記されている。西蓮寺の檀家は上野町の旧家と重なる場合が見出され、「西蓮寺過去帳」からは、各々の町村における家格ある有力者の存在とその移動を把握し得ると考える。物故者の出身地や暮らしていた町名など、書き込まれている情報量が多いことも「西蓮寺過去帳」の特徴である。

上野の城下町に西接する^{ながた}長田の西蓮寺(第4-1図)は、歴代の上野城城代家老、

このプレビューでは表示されないページがあります。

第5章 下野国烏山城下町における付祭り内容と担い手の変化

第1節 中近世移行期における烏山城下町の住民構成と付祭り内容

1. 戦国期城下町の住民構成

(1) 中近世移行期における烏山城下町の構造

16世紀後期の城主那須資胤の時代には、常陸国の佐竹義重との間に幾度かの合戦を交えていた。永禄13年(1570)の「佐竹義重書状写」には「烏山宿根古屋無残打散候、爰元落居不可有程候」とあり、5月11日に、烏山は佐竹勢から攻撃を受けていた。この書状から、当時の烏山城には防衛機能を有する根古屋、および「宿」と呼ばれる町場がすでに存在していたことが判る。烏山の北に位置し、上那須氏の有力一族である大関氏の一拠点として発展した大桶(第5-1図)にも「根古屋」「やうがえ」などの小地名が残り、根古屋城跡の麓に「宿」の地名も残っている。戦国期には、下那須地方では烏山の他にも下境の稲積城、森田城、牧野館(第5-1図)など、上那須地方では大桶、大田原、福原、神田、黒羽、金丸などの各地に城・根古屋・宿から成る戦国期の小規模な城下町が成立していた。

烏山の鎮守である天王社(現、八雲神社の御仮屋)は、那須資胤の時代の永禄3年(1560)に、「十文字」と呼ばれる宮原と直結する交差点に勧請された。天王社の神主を兼務した宮原八幡宮の斎藤氏の「日誌」には「正一位牛頭天王社 永禄三年庚申建立」と明記されているため、当年における烏山への天王社勧請の信憑性は高い。天王社が烏山町の十字路に勧請されたことから、烏山への家臣団や商人らの集住、烏山の市や宿の存在などが想定される。大桶からの天王社の勧請は、上那須・下那須地方の統合の一步とみることができる。16世紀後期的那須資胤の時代に、烏山における人口と商工業的機能は充実していったものと考えられる。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第6章 結 語

第1節 上野と烏山における総鎮守とその付祭りの変化の共通性と相違

1. 城下町の総鎮守の検討

本書で主にみてきた上野および烏山の両城下町における現行の付祭り内容は、城下町が建設されて以降、変化なく継承されてきたものではなかった。付祭り内容の変化は時代ごとの人々のさまざまな価値観の変化を経て、取捨選択された結果であった。

城下町の総鎮守の付祭り内容だけではなく、一見変化が乏しいと思われる城下町を守護する総鎮守さえも、城主の交代や明治期の神社合祀などを契機として、その所在地や規模、氏子構成に変化が生じるケースは少なくなかった。上野の総鎮守、上野天神宮もその一例であった。上野天神宮は平楽寺の鎮守であったが、天正9年(1581)の織田勢による伊賀郷土掃討作戦(天正伊賀の乱)によって破壊され、社は上野村における山神の地に遷宮された。

国や荘園、城、町といった領域全体を守護する鎮守社の造立や修築、その神事の執行は、中世領主の重要な役目であった。しかし、多くの祭礼では、領主を中心に執行される神事に加えて、領民を担い手とする付祭りも行われてきた。この領民が行った付祭りのことを本書では神事との混同を避けるため「付祭り」と呼び、区別した。本書では、町の総鎮守における神事や領民が行った付祭り内容の変化から、城下町の構造や付祭りの担い手となった城下町町人の生活文化とその変容を読み解いた。

16世紀末に大和国から伊賀国上野城主となった筒井定次は、長田川・木津川水運および大和街道による水陸両運での大和国とのかかわりを重視し、平楽寺跡に城郭を築き、上野台地西端部から沖積低地に城下町を形成した。このとき建設された城下町は、城の西端に設けられた北口と南口の虎口、すなわち旧大

このプレビューでは表示されないページがあります。

参考文献・引用史料

【参考文献(編著者名五十音順)】

- 秋田県編『秋田県史』民俗・工芸編，秋田県，1978年。
- 足利健亮『中近世都市の歴史地理——町・筋・辻子をめぐって』地人書房，1984年。
- 厚 香苗『テキヤはどこからやってくるのか？——露店商いの近現代を辿る』光文社新書，光文社，2014年。
- 阿部 彩『弱者の居場所がない社会——貧困・格差と社会的包摂——』講談社現代新書 2135，2011年。
- 安斎正人・小野正文・黒沢 浩・榎山林継・平川 南『祭りの考古学』学生社，2008年。
- 伊賀市編『伊賀市史』第1巻・通史編・古代中世，伊賀市，2011年。
- 五十嵐 勉「伊賀国における郷土集落の地域構造」，歴史地理学会編『歴史地理学紀要 26 都市・村落関係の歴史地理』古今書院，1984年。
- 池田貞夫・黒崎孝雄『とちぎの屋台と山車』，1998年。
- 市村高男『戦国期東国の都市と権力』思文閣出版，1994年。
- 市村高男「戦国期下那須氏権力の一断面——『那須政資法要香銭注文』の分析——」，『中央学院大学商経論叢』10巻1号，中央学院大学，1995年。
- 市村高男「古賀・山村両報告へのコメント」，中世都市研究会編『中世都市研究 7 都市の求心力——城・館・寺——』新人物往来社，2000年。
- 市村高男「戦国期城下町研究の視点と方法——相模国小田原を事例としたその実践的考察——」，『国立歴史民俗博物館研究報告』127集，国立歴史民俗博物館，2006年。
- 伊藤寿和「古代・中世の『野畠』に関する歴史地理学的研究」，『日本女子大学大学院文学研究科紀要』1号，日本女子大学，1995年。
- 伊藤寿和「下野国の街道と宿場町に関する基礎的研究——日光道中壬生通りと楡木宿を中心として——」，鹿沼市史編さん専門委員会編『かぬま 歴史と文化——鹿沼市史研究紀要——』5号所収，鹿沼市，2000年。
- 伊藤裕偉「『都市』の相対性，あるいはその『うち』と『そと』」，伊藤裕偉・藤田達生編『中世都市研究 13 都市をつなぐ』新人物往来社，2007年。
- 井上智勝『古田神道の四百年』講談社選書メチエ，講談社，2013年。
- 茨城県農業史研究会編『茨城県農業史料』地場産業編，茨城県農業史編さん会，1985年。
- 茨城大学中世史研究会・常陸大宮市歴史民俗資料館編『館と宿の中世——常陸大宮の城跡とその周辺——』常陸大宮市，2009年。
- 植木行宣「上野天神祭の成立と展開」，上野市教育委員会編『上野天神祭総合調査報告書』上野市教育委員会，2001年。
- 植木行宣「練物から山・鉾・屋台の祭りへ」，まつり・祭・津まつり展実行委員会事務局編『まつり・祭・津まつり展事業記録集』まつり・祭・津まつり展実行委員会事務局，

このプレビューでは表示されないページがあります。

索引

あ 行

「赤坂町祭礼記録(祭礼記録)」 23, 50,
51, 56, 57, 58, 182, 192, 193, 195,
196, 224, 226, 227, 228, 229, 230,
231, 232, 235, 245, 247, 248, 250,
253, 254, 255, 256, 257, 258, 259,
261, 277, 282, 283
愛宕神社 35, 38, 275
阿拝神社 35, 36, 37, 41, 99, 106, 155,
274, 276
操り 189, 190, 192, 193, 194, 195, 199,
225, 257, 258, 259, 277
「伊賀上野天満宮祭礼九月廿五行列略
記」143, 144
伊賀街道 109, 110, 125, 274
「伊賀旧考」 97, 105, 106, 135, 142
伊賀廻し 137, 151
石引き(石引) 127, 128, 129, 132, 133,
156, 158
「伊水温故」 30, 32, 33, 34, 35, 36, 38,
42, 91, 96, 97, 98, 99, 107
「伊勢歌舞伎浄瑠璃年代記」 232
「伊勢津八幡御祭礼図巻」 146
板橋五郎右衛門 183, 192, 221, 252
市場町 18, 237, 248, 261
「一ヶ年分見積り覚」 237
稻積城 46, 48, 171, 172
「伊乱記」 32, 42, 43, 91, 96, 98
宇井土喜兵衛 236, 237
「上野古図」 37, 86

上野台地 32, 33, 34, 36, 37, 38, 39, 41,
91, 92, 97, 99, 105, 106, 107, 155,
273, 274
上野天神宮 31, 34, 35, 36, 37, 38, 39,
40, 41, 93, 98, 107, 111, 136, 141,
142, 155, 156, 273, 274, 275, 276, 280
上野天神祭 38, 39, 41, 98, 107, 131,
134, 135, 136, 143, 144, 148, 149,
150, 151, 152, 154, 156, 157, 275,
280, 281, 282, 287
「上野町旧記目録(旧記目録)」 43, 133,
134, 136, 143, 145
薄井友三郎 238, 239, 240
「宇都宮史」 227
宇都宮城下町 192, 210, 227, 278
馬揃え 70, 80, 156
「永保記事略」 36, 43, 58, 75, 109, 110,
114
枝町 113, 114, 116, 138, 141, 143, 148,
154, 156, 157, 280, 282, 285
江戸歌舞伎 235, 246
江戸紙商人 201, 202, 203, 204, 205, 211,
216, 240, 256, 261, 283, 285
江戸天下祭図屏風 44, 77, 123
『江戸町触集成』 120
「榎本弥左衛門覚書」 52, 189
演劇(歌舞) 15, 67, 68, 72, 235, 287
演能 134, 135, 136, 185
亭續み 109, 114, 115, 116
大鐘家 28, 53, 56, 57, 62, 63, 182, 204,

このプレビューでは表示されないページがあります。

●著者紹介

渡辺 康代 (WATANABE Yasuyo)

1973年 栃木県宇都宮市生まれ。

1996年 日本女子大学文学部史学科を卒業。

2001年 筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学。

2015年 博士(文学)筑波大学。

現在、帝塚山大学および三重大学非常勤講師。

主著：『生活文化の地理学』(共著)，古今書院，2019年。『近世武士の生活と意識「添田儀左衛門日記」——天和期の江戸と弘前——』(共著)，岩田書院，2004年。「近世城下町桑名における祭礼の変容——住民の生活文化としての祭礼へ——」，『歴史地理学』48-4，2006年。「近世城下町における祭礼形態の変容——下野国那須郡烏山を事例として——」，『地理学評論』72-7，1999年。

Dynamics of Festivals in Japanese Castle Towns During the Edo Period

by WATANABE Yasuyo

きんせいじょうかまちのつけまつりのへんか

近世城下町の付祭りの変化

——伊賀国上野と下野国烏山を事例に——



本書web

発行日：2020年3月30日 初版第1刷

定価：カバーに表示してあります

著者：渡辺 康代

発行者：宮内 久



海青社
Kaiseisha Press

〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4
Tel. (077) 577-2677 Fax (077) 577-2688
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>
郵便振替 01090-1-17991

© WATANABE Yasuyo, 2020.

ISBN978-4-86099-377-1 C3025 Printed in JAPAN. 印刷・製本：亜細亜印刷株式会社

落丁・乱丁の場合は弊社までご連絡ください。送料弊社負担にてお取り替えいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。